



つみきのいえ

絵 加藤久仁生 文 平田研也 白泉社 2008

長かった夏休みもおわり、新学期が始まりましたね。みなさんはどんな夏休みを過ごしましたか？ 今月9月18日は**敬老の日**です。おじいさんとおばあさんの美しくあたたかいおはなしを今月は紹介します。うみのみずがだんだんとうえにあがってきてしまうまち。このまちのひとたちは、うみのみずがあがってくるごとに、家がうみのなかにはいってしまうため、家のうえに家をたて、どんどんいえをつみきのようにつみかさねて生活しています。そんなまちにすむひとりのおじいさん、このおじいさんは3ねんまえにだいすきだった奥さんを亡くしてしまい、ひとりぼっちで生活しています。そろそろまた、うみのみずがあがってきて、つぎのあたらしいおうちをたてようとしていたある日、おじいさんはかなづちを海のなかへおとしてしまいます。おじいさんはうみの中へとかなづちをひろいにはいっていくと、そこには、自分がいまですんできた家が下へ下へ続いていました。それは、愛する奥さんと過ごしたかけがえのない思い出…。おじいさんは、一軒一軒おばあさんとの思い出をたどりながら、下へ下へとおりてゆきます。おばあさんと出会った日、おばあさんと結婚した日、ふたりのあいだに子どもがうまれた日、そしておばあさんが亡くなる日…。一軒ごとに、そこで暮らした当時の生活や日常がすまなくなってしまういまそこにはきちんと残っていました。加藤久仁生さんの淡くやわらかいイラストが映画のワンシーンのように美しく、おもしろく涙してしまいます。おじいさんがおばあさんと出会った日、そして結婚した家は海の底の一番したにある家です。この家の高さ、海の深さがおじいさんの一生をあらわしているのです。まちの人たちは、むかしはおじいさんのように、いえをつくりつづけ、住んでいましたが、いまはみんないえをつくるのをやめてこのまちから出ていってしまいました。でもおじいさんはなくなったおばあさんとの思い出のつまったこのいえをぜったいにはなれようとはしません。そこからもおじいさんのおばあさんへの愛が伝わってきますね。夫婦ってわたしはいつもすごい関係だなあと感じます。両親や祖父母を見ていてもいつも思いますが、お互いが唯一無二の存在というか、言葉はなくても愛し合っている、すごい絆でむすばれているのだなあと。他人から家族になるんですもんね。離婚をしてしまったり、うまくいかない夫婦もなかにはいますが、人生の大半を他人であるだれかと出会い、一生連れ添う…。先月のふしぎ特集でも書きましたがそんな人にきっと出会うべくして出会っているのかなあと思います。きっとこのおじいさんも、きっとこれからもおじいさんのこのつみきのいえはどんどんと高くなっていくのでしょうか、いや、高くなってほしいと願います。亡くなってもこんな風に想ってもらえる…。こんなすてきな夫婦になりたいものですね。

